萬葉集略解

十下

和書門 類
二〇四三七 號
九八 函
架
三二 冊

内閣文庫
和書 類
二〇四三七 號
三二 冊
二六三函
一五架

内閣文庫		
番號	和	20437
冊數	32	(15)
函號	263	44

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

僧ハ俱ノ誤

詠花

竿志鹿之心相念秋芽子之鐘禮零丹落僧惜毛

さをしかのこゝろあひおもふあきはぎのしぐれのふるにちらまくをしも

和名抄霡霂小雨也之久礼 とまそいつも定まれることなし、萩ハ秋に

て初冬のものと定めたるハ後世のことなり、僧ハ俱の誤なり、次下に散

久惜裳とあると同じ、俱の字はつきてくたりし従あれど誤なりつま

りしるべし

夕去野邊秋芽子末若露枯金待難

ゆふされハのべのあきはぎうらわかみつゆにぞかれるあきまちがたみ

秋をまたずの時として、葉かるる時とも結びして、またことをたつむく

集中、梅花雪尓志乎礼足よしよめり、室ちるを枯ハ誤の誤なり、つゆに

ぬれてちるべしといへり、猶考べし

浅草文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

右二首柿本朝臣人麻呂之謌集出

真葛原名引秋風吹毎阿太乃大野之芽子花散

まくずはらなびくあきかぜふくごとにあだのおほののはぎのはなちる

和名抄大和宇智郡阿陀 陀濁讀 とあり、巻一内の大野とよめるもほどきの

鴈鳴之来喧牟日及見乍将有此芽子原尓雨勿零根

かりがねのきなかんひまでみつゝあらんこのはぎはらにあめなふりそね

此下に於てはぎは雁のわたりしといへれども花のおつるをまちてふるぞおしむるこゝ

ろなく、雁の来る比は、はやおちぬるものなれば、かくいへり

奥山尓住云男鹿之初夜不去妻問芽子之散久惜裳

おくやまにすむといふしかのよひさらずつまどふはぎのちらくおしも

初夜のよはよひのことをいへど、初夜とかかれば、こゝは宵の

方のことく、かよふなるをいふ。よひさらずとは宵ごとにといふ事也。はぎを

麻の花妻といへばかくよめり。

白露乃置巻惜秋芽子乎折耳折而置哉枯

しらつゆのおかまくおしみあきはぎをおりのみおりておきやからさん

巻十八橘をよめる長うたに於枳弖可良之(オキテカラシ)といへるは、本より合枯

なからしては露の降るを惜しみて、折て枯さんより

秋田苅借廬之宿尓穂経及咲有秋芽子雖見不飽香聞

あきたかるかりほのやどにほふまでさけるあきはぎみれどあかぬかも

吾衣摺有者不在高松之野邊行之者芽子之摺類曽

わがころもすれるにはあらずたかまつののべゆきぬればはぎのすれるぞ

すれるとはするにはあらず、行之者ゆきしのばと訓

ぜしかど、契沖は之の下香可ぶの字落たるといへり、おもふに之は去の

誤なるべし、ゆきぬればとあるべし、去来て衣を芽子にすれ

こゝハあらそひかねてかさぬる衣をもほすとよめるなり

此暮秋風吹奴白露爾荒争芽子之明日将咲見

このゆふべあきのかぜふきぬしらつゆにあらそふはぎのあすさかむみん

花ハさかんとするを露のおりて咲せじとあらそふるゆゑ争ふといへる也

秋風冷成奴馬並而去来於野行奈芽子花見爾

あきのかぜひやゝかになりぬうまなめていざのにゆかなはぎのはなみに

[illegible]

朝杲朝露負咲雖云暮陰社咲益家禮

あさがほハあさつゆおひてさくといへどゆふかげにこそさきまさりけれ

槿花ハ朝にさくものなれど、槿花ハ朝に咲て、昼にしぼむものなり、

朝顔とよむものゝ時なるに、朝顔の花ハ昼までも咲ものなれば

夕ばえをもしく見えつる所をよみ、夕かげにさきまさると也

あさがほ、杲ハあさかほとも杲ともかくなり

春去者霞隠不所見有師秋芽子咲折而将挿頭

はるされバかすみがくれてみえざりしあきはぎさけりをりてかざさむ

春ハ霞にかくれて見えざりし秋萩の咲たるをりてかざさむとよめる

意なり

沙額田乃野邊乃秋芽子時有者今盛有折而将挿頭

さぬかだののべのあきはぎときなれバいまさかりなりをりてかざさむ

さぬかだハ地名

事更爾衣者不摺佳人部為咲野之芽子爾丹穂日而将居

ことさらにころもハすらじをみなへしさきぬのはぎににほひてをらん

[illegible]

[illegible]

之ハ久ノ誤 竟ハ豆見ノ誤

秋風者急之吹来芽子花落巻惜三竸竟

あきのかぜハはやくふきこぬはぎがはなちらまくをしみきほひたゝん

之ハ久の誤なるべし、競竟を四州ハおほろくあてあかいうそるるすさまう

まらで、竸ハ竟ハ立見の誤なるべく、きそひたちみんとして風ニ競ひたちら

じとするさまをみんといふなりふくれつれど極あるべし、技ニ竟ハ立

見の誤なるべく、あらそひてみんなるべし、牡風の意て吹ニ争てちるぬ

はぎをみんといふなり

我屋前之芽子之若末長秋風之吹南時爾将開跡思乎

わがやどのはぎのうれながしあきかぜのふきなんときにさかんとおもひて

乎一本手に作るそよきを是ハまづさきのみなほくとよめり

乎ハ手ノ誤

人皆者芽子乎秋云縦吾等者乎花之末乎秋跡者将言

ひとみなハはぎをあきといふよしわれハをばなのうれをあきとハいはん

皆人ハはぎをのミ秋の物といへど、されど尾花をこそ秋のさまのことハ

いはんといふなり

猿ハ猨ノ誤　之ノ下名ハ毛ノ誤

玉梓公之使乃手折来有此秋芽子者雖見不飽鹿裳

たまづさのきみがつかひのたをりけるこのあきはぎハみれどあかぬかも

むづきの枕詞、けるハ別来るのことを

吾屋前爾開有秋芽子常有者我待人爾令見猿物乎

わがやどにさきけるあきはぎつねならばわがまつひとにみせましものを

手寸十名相殖之名知久出見者屋前之早芽子咲爾家類香聞

たぎそなへうゑしもしるくいでみればやどのわさはぎさきにけるかも

たぎハたづきを得ることゝ、たづき備へ、たけハぬれたがねバあさき妹っの歌

とちあるたけを同じ、秋の七種なるどを多くうゑて植るすゑニたぎその名に

ゝるをいへり、之の下名ハもの脱たるか、之居かもしもしくはこそ付やらか、
其咲たるをわさたるといふ
吾屋外爾殖生有秋芽子乎誰標刺吾爾不所知
わがやどにうゑおほしたるあきはぎをたれのしめさすわれにしらえず
これハ我植おきしはぎを、我にしられぬやうにして人の取しをいふ
たとへたる也、荒木田翁のおもへるとぞ、その上のみならず、ながくいふなるべし
手取者袖并丹覆美人部師此白露爾散巻惜
てにとればそでさへにほふをみなへしこのしらつゆにちらまくをしも
女郎花といへり、覆ハおほふを略して仮名か
白露爾荒争金手咲芽子散惜兼雨莫零根
しらつゆにあらそひかねてさきたるはぎちらばをしけむあめなふりそね
あらそひかねてハよりていへるなり

娘子等行相乃速稲乎苅時成来下芽子花咲
をとめらがゆきあひのわせをかるときになりにけらしもはぎのはなさく
をとめらがといひかけて、行あひのわせハ夏と秋と行あふころの
わせを稲といふなるべし
朝霧之棚引小野之芽子花今哉散濫未猒爾
あさぎりのたなびくをぬのはぎのはないまやちるらんいまだあかなくに
霧に隠れて見ぬを思ひやりてよめるなるべし
戀之久者形見爾為与吾背子我殖之秋芽子花咲爾家里
こひしくはかたみにせよとわがせこがうゑしあきはぎはなさきにけり
夫の遠き所に往るのち、あるじハ植おきしなるべし
秋芽子之戀不盡跡雖念思恵也安多良思又将相八方
あきはぎにこひつくさじとおもへどもしゑやあたらしまたあはめやも

なハすぎるさのこゝろをあらてまどきてやまんぞ、さく志るまやハ歌意の殆

とくあるとしハやゝ悦むこゝあやしハおるなバ又花よあるべきやく

秋風者日異吹奴高圓之野邊之秋芽子散巻惜裳

あきかぜハひゞにふきぬたかまどのゝべのあきはぎちらまくをしも

丈夫之心者無而秋芽子之戀耳八方奈積而有南

ますらをのこゝろハなしにあきはぎのこひにのみやもなづみてありなん

第六丈夫の心ハちりしみることを、花まのこゝろをつくして恨みまさるんやなめづる

ゆゑなるわりよえゝ

吾待之秋者来奴雖然芽子之花曽毛未開家類

わがまちしあきはきたりぬしかれどもはぎのはなぞもいまださかざる

若しのてハ助辞、さこのむとなるハさこのふりなるく

欲見吾待戀之秋芽子者枝毛思美三荷花開二家里

みまくほりわがまちこひしあきはぎハえだもしみゝにはなさきにけり

しみゝハ繁きく

春日野之芽子落者朝東風爾副而此間爾落来根

かすがのゝはぎしちりなばあさごちのかぜにたぐひてこゝにちりこね

こちらのちよ風のことハあれどかくまねりてハあしくのちこそいふべし

秋芽子者於鴈不相常言有者香 一云言有可聞 音乎聞而者花爾散去流

あきはぎハかりにあハじといへれバのこゑをききてハはなにちりぬる

よく鴈がねのまなのんほまで見つゝあんらしとあるめく、鴈のきる時

はぎのおとるれバ鴈も逢まじきと契せるこのこゝろまくがくいふ哉こ

ハあだなりといふことへ一本のにつるのもいふらじ

秋去者妹令視跡殖之芽子露霜負而散来毛

あきさらばいもにみせむとうゑしはぎつゆじもおひてちりにけるかも

今本萩を詠る一首にまぎれぬ

詠鴈

秋風。山跡部越。鴈鳴者。射矢遠放。雲隠筒

あきかぜにやまとへこゆるかりがねはいやとほざかるくもがくれつつ

此うたは秋風に山飛越る鴈がねの群遠ざかりて雲隠るらし といへるは此云

の一本なるべし。いづれのりにても これは山跡部とあれは大倭へおく山飛

越るとは異之。部は江のごとくよむべし。考云山跡とかけるは山とびこ

しなされば倭朝越る鴈しるしとしるべきに見て

明闇之。朝霧隠。鳴而去。鴈者吾戀。於妹告社

あけぐれのあさぎりごもりなきてゆくかりはわがこふるいもにつげこそ

あけぐれはほのぐらきをいふ。告こそは妹につげこそせよといふこと

けふくひ吾と本言にあるは誤て一ぬにありてぬつ

五吾屋戸。爾鳴之鴈哭。雲上爾。今夜喧成。國方可聞遊群

わがやどになきしかりがねくものうへにこよひなくなりくにへかもゆく

今本國方可聞をくにつかたかもとして遊群の二字を此歌に次ぎに放ち

きこえし遊群はゆくのかなるをひがみたるなり。又こは荷田翁の

考へかのゆくはゆふべの御いのちを遊りし事の上もしかも事ぶ見

ゆくは汝が故郷の家へいのちらんとよめる也。後世の如く雁は秋来る

をかへるさまにみのみ、きゝあくよめるまなし

左小牡鹿之。妻問時爾。月乎吉三。切木四之泣。所聞今時来等霜

さをしかのつまどふときにつきをよみかりがねきこゆいましくらしも

考云斉の折木四哭之云しとあるもかりがねと訓べし かくいふるは

いのちなりけりとこそよまれたれ、いましのしハ助辞
天雲之外鴈鳴従聞之薄垂霜零寒此夜者
あまぐものよそにかりがねきゝしよりはだれしもふりさむしこのよハ
ちるれハ斑にて、薄垂ハかたしぶりハ義をかなへ、斑れなるへくさむしとて皆
一云彌益益爾戀許曽増焉
かくしるべし
秋田吾苅婆可能過去者鴈之喧所聞冬方設而
あきのたのわがかりばかのすぎぬればかりがねきこゆふゆかたまけて
かりばかのハ苅ばかりの秋の田の穂田の刈婆加のかよ妻しくいでり
葦邊在荻之葉左夜藝秋風之吹来苗丹鴈鳴渡
あしべなるをぎのはさやぎあきかぜのふきくるなへにかりなきわたる
和名抄野王案云、荻和名乎木與萩相似而非一種矣、苗ハ借字にて並く

武ヲ或ニ作

一云秋風爾鴈音所聞今四来霜　是ハたゞまくらの詞にて
押照難波穿江之葦邊者鴈宿有疑霜乃零爾
おしてるなにはほりえのあしべにハかりねたるかもしものふらくに
おしてる枕詞、ふらくハふるを延ていへ
秋風爾山飛越鴈鳴之聲遠離雲隠良思
あきかぜにやまとびこゆるかりがねのこゑとほざかるくもがくるらし
此哥のこゝろあきらけし
朝爾往鴈之鳴音者如吾物念可毛聲之悲
あさにゆくかりのなくねハわがごとくものおもへかもこゑのかなしき
つとハ朝時の略名とおいきれき、つとめて、とりし同詞ぞ、ねりべし
多頭我鳴乃今朝鳴奈倍爾鴈鳴者何處指香雲隠良武
たづがねのけさなくなへにかりがねハいづくさしてかくもがくるらむ

たづのむらハ鶴群なるべければ雁がねハ雁群なるべし、翁いはれつれど、群を
ねといへる例なし、かりつよたづのね、雁がねも、音なるがうたがひなくさらなるの
名のあく来れるなるべし、哉と哉を隠れまた鴈な信くぬつ

野干玉之夜度鴈者欝幾夜乎歴而鹿已名乎告

ぬばたまのよわたるかりハおぼつかな いくよをへてかおのがなをのる

反根集に引るうたも、かしこに採られやくる時ど、ふかおぼつかなく
きこゆまもかよと鳴よしをよみたるを、夜ふかくてほのかにきこゆるなど
さくてこのハ次の歌なるを、夜渡る鴈をよめるなれバ也

璞年之経往者阿跡念登夜渡吾乎問人哉誰

あらたまのとしのへゆけバあどもふと よわたるわれをとふひとやたれ

鴈はなるく鳴のおほよふるくおもへバ、紀に誘の字をあとくいふなど
一 あたこゝろ、至年要のゆゑて、昔のままいてかく見れバ古き友と

なるかめつるまゝに友をいざなひわたるを、あゝとなきつゝよはにこゝに人や
これとハよみたる

詠鹿鳴

比日之秋朝開爾霧隠妻呼雄鹿之音之亮左

このごろのあきのあさけにきりがくれ つまよぶしかのこゑのさやけさ

紀に寥亮をさやこゝよめり

左男牡鹿之妻整登鳴音之将至極靡芽子原

さをしかのつまどふとなくこゑのいたらんきはみなびけはぎはら
考ニ、細子こての上るとよみかなへるそ、考七妹がめしあ行みちの志
のぞきこれを遊びびけしのいつとよみるに、麻の母こりん婿なれバ
うくいつり、翁ハ整ハ将求二字の誤なるべく、つまをもとめんとなくらんこの
ないふれき

於君戀裏觸居者敷野之秋芽子凌左牡鹿鳴裳

きみにこひうらぶれをればしきのゝのあきはぎしのぎさをしかなくも

しきのゝハ大和磯城郡の野なるべし 凌きハふみわくるをいふ

鴈来芽子者散跡左小牡鹿之鳴成音毛裏觸丹来

かりきたりはぎはちりぬとさをしかのなくなるこゑもうらぶれにけり

かりきたりはぎハちりぬとさをしかのなくなることもうらぶれにけり

ちりぬると鹿の妻こふといへバのくよめる 鹿のなくを此はぎのちるを見てハよめ

うらぶれ 又出

秋芽子之戀裳不盡者左小鹿之聲伊續伊繼戀許曽益焉

あきはぎのこひもつきねバさをしかのこゑいつぎいつぎこひこそまされ

つきねバハつきぬにて 萩ちるよ丈夫のなハちりて萩さぎの声をのみや

こひしく此声ハ人のこふると声なれハ下の声こそまされハ人の声まさる

萩ちると声まで声ありても つきぬまゝにさきまでつぎてなるなり

のまさるといふ いつぎのいハ發語なり つぐハ下の伊ハ衍文か 伊つぎつぎ

といふべし 或ハあまたあきをさるといふ説あり

山近家哉可居左小牡鹿乃音乎聞乍宿不勝鴨

やまちかくいへやをるべきさをしかのこゑをききつゝいねかてぬかも

あゝてやハ居るべきといふにて ぬハ夜のねられぬよし 鹿の声をきゝ

けバ物思ひそふるのこゝろなり

山邊爾射去薩雄者雖大有山爾文野爾文沙小牡鹿鳴母

やまのべにいゆくさつをはおほかれどやまにものにもさをしかなくも

いゆのいハ發語 さつをハ猟人之大ハ借字多き 鹿のものがなしの略

足日木笑山從来世波左小鹿之妻呼音聞益物乎

あしひきのやまよりきせばさをしかのつまよぶこゑをきかましものを

山より越来るべきせバのせハ来せぬ つきせぬなどのせにて 上ら一体

首、麻の上え唐本牡のさまを

山邊庭薩雄乃禰良比恐跡小牡鹿鳴成妻之眼乎欲焉

やまのべにはさつをのねらひかしこけどをしかなくなりつまのめをほり

かしこけどハ、ねらふをおそるれどものこゝろく狩人とかし、むかへめをほりハ、めんまのひ

しむとりて

秋芽子之散去見鬱三妻戀為良思棹牡鹿鳴母

あきはぎのちりゆくをみていぶせみつまごひすらしさをしかなくも

いぶせミハ、心のむすぼれたるこゝろ、是ハ麻呂の心をおしてかく

いふ

山遠京爾之有者狹小牡鹿之妻呼音者乏毛有香

やまとほきみやこにしあればさをしかのつまよぶこゑハともしくもあるか

京ハ義をとりて訓べし、ともしきハめづらしきこゑ

秋芽子之散過去者左小牡鹿者和備鳴将為名不見者之焉

あきはぎのちりすぎゆかばさをしかハわびなきせんなみねばともしみ

みざれば見たきさまなれバ、見たし　麻呂の心をおしはかりてかく

あきを思ひてハさびしうおもひてなくらんといふ心、焉一本見乎作

秋芽子之咲有野邊者左小牡鹿曾露乎別乍嬬問四家類

あきはぎのさきたるのべハさをしかぞつゆをわけつゝつまどひしける

奈何牡鹿之和備鳴為成蓋毛秋野之芽子也繁将落

なぞしかのわびなきすなるけだしくもあきのゝはぎやしげくちるらん

なぞとハなどゝいふ心、けだしくハ麻呂のこゝろもあるハなぞハ、そのしらぬをあとくちる

ゆゑにやあんとりて

秋芽子之開有野邊左牡鹿者落巻惜見鳴去物乎

あきはぎのさきちるのべのさをしかはちらまくをしみなきぬるものを

このうたの詞まへにしるしたれバ此にハもらす

足日木乃山之跡陰爾鳴鹿之聲聞為八方山田守酢兒

あしびきのやまのかげになくしかのこゑきこすやもやまだもらすこ

さうげハ、歌ハかのたのいちせのかなほとりおはそて鳴のねの山のかげ

こゑをあはれしくいふ、きこすハきくを延言、もらすハもるを延言、

巻一の、菜つまちて子の條の例く按ずれバ山田もるをとめにて、さてハ

略子のかすこもせで、前にも注によみられたれどよのつね汲、

詠蟬

暮影来鳴日晩之幾許毎日聞跡不足音可聞

ゆふかげにきなくひぐらしこゝだくもひごとにきけどあかぬこゑかも

ゆふかげハ夕暮也、こゝだくハ、こゝら、それ、あまたといふに同じ

詠蟋蟀

秋風之寒吹奈倍吾屋前之淺茅之本蟋蟀鳴毛

あきかぜのさむくふくなへわがやどのあさぢがもとにこほろぎなくも

蟋蟀ハ旧訓きりぎりすとよみられど翁これをこほろぎと訓て、これハ和名

抄に、文字集略云蟋蟀精列二音、和名古保呂木とあるによりてなり、

春海云蟋蟀といふ名ハ、文選晉張孟陽七哀詩に、仰聽離鴻鳴、俯聞

蜻蛚吟と見え、李善が注に、易通卦験曰、立秋蜻蛚鳴、蔡邕月令章句

曰、蟋蟀虫名、俗謂之蜻蛚といひ、又古詩に蟋蟀吟、蜻蛚吟と通じて見え二

いづかれバ蜻蛚と蟋蟀ハ同物なれバ、蜻蛚に古保呂木と訓あるく、古より

蟋蟀もこほろぎの名あるべく、その世も名と傳へられバ、志のよむ

べきこと、すべて萬葉に蟋蟀とあるをこほろぎと訓ざれバ詞かなく調べ

とものそざるを、こほろぎといふ名の、たゞ萬葉後の書に見えぬなくさく、

歌よむ人あれど此集によめる草木などの名の侭今多くハ絶て以て知りがたきあ
まゝあれバ其のみ能く之へきまであらねど又彼ハ古書ニきこえしとも見えず
集の此度の歌ニハきりぎりすとよめる名のごとよめるハ蟋蟀ニ二名ありこの事ニ
きりぎりすといへる名のことハ度々ハ其まゝとなりしりのよう見え和名抄ニ兼名苑云
蟋蟀悉率二音一名蛬和名木里木里須と見えたれバきりぎりすといふ
名也古くいへる名なるべし後世なるはたおりめの歌なる一種の虫をきりぎりすと
といふハいにしへより誤り来たるべし又或人和名抄の古本ニ蟋蟀と支
利々須とあれバ此集の歌どもきりぎりすとよめれども古寫の梁
塵秘抄又今本の梁塵愚案抄ニもきりぎりすとのみもよみたれバきり
ぎりすといへるハ末也古本の和名抄ニ支利々須乃と見えハ利の一字をはぶり
たる歌ども見えたれど今ニきりぎりすといへる例もなきをれバ支利の一字
をはぶりしるまじのおもひつのあやまりしそのくといへるハさかしる

こほろぎとよまんよりハ猶ふるくきこゆれバ人のまよひつべきゆゑなれバいふなり

影草乃生有屋外之暮陰爾鳴蟋蟀者雖聞不足可聞
かげぐさのおひたるやどのゆふかげになくこほろぎハきけどあかぬかも
此の陰草の影ハ物の陰ニ生る草をかげ草といふ

庭草爾村雨落而蟋蟀之鳴音聞者秋付爾家里
にはくさにむらさめふりてこほろぎのなくこゑきけバあきづきにけり
庭草ハ庭ニ生る草なり和名抄ニ地膚 尓波久佐一名末木久佐 とあるハ今ハ々きゝといふ
こほろぎハ此集の歌どもハことく此ハ仏もくといふ事ニや

詠蝦
三吉野乃石本不避鳴川津諾文鳴来河乎淨
みよしののいはもとさらずなくかはづうべもなきけりかはをさやけみ
川の清さよりかハづの信くなるしろうべきなりとなり

神名火之山下動去水丹川津鳴成秋登将云鳥屋
かみなびのやましたとよみゆくみづにかはづなくなりあきといはんとや
かはづを古へ秋のものとしてよめる例なり、秋といはんとやハ秋といふらんやのこゝろ
草枕容雨物念吾聞者夕片設而鳴川津可聞
くさまくらたびにものおもひわがきけばゆふかたまけてなくかはづかも
片まけハ片向のこゝろ
瀬乎速見落當知足白浪爾川津鳴奈里朝夕毎
せをはやみおちたぎちたるしらなみにかはづなくなりあさよひごとに
是ハ借字なく、たぎち而智之
上瀬爾河津妻呼暮去者衣手寒三妻将枕跡香
かみつせにかはづつまよぶゆふされバころもでさむみつままかんとか
娃のなくを人の妻どひのくるしきにして、おしてよめる之

百舌ヲ百二誤

詠鳥
妹手乎取石池之浪間従鳥音異鳴秋過良之
いもがてをとろしのいけのなみのまゆとりがねけになくあきすぎぬらし
いもがてを枕詞、取石池ハ聖武紀に、行還至和泉国取石頓宮とあり、和泉ニ
これなるべし、姓氏録ニ、取石造和泉国諸蕃の下ニ出たり、しも和泉ニ
ところの池なりとぞ、浪の間従の従ハからくんべし、此ぐるハ将久之
よみこゝろ野鳴けぞ之
秋野之草花我末鳴百舌鳥音聞濫香片聞吾妹
あきのののをばながすゑになくもずのこゑきくらんかかたきくわぎもこ
かぞへハ旗むしで舌百とあるハ誤なりとぞ、ハ只秋、その鳴あるを妹がゆゑらん
思ひやる之宮ぎニ片聞ハ片待の誤れといつるハ、のさまゝニも片聞
まゝてすまへくまなし、片まつわざしハ尋ねをも妹をまちよするべし、

草花をこそむれとよめるハ、巻一ニ芙草をこそむれとよめるなるへし

詠露

冷芽子丹置白露朝朝珠斗曽見流置白露

あきはぎにおきたるしらつゆあさなさなたまとぞみゆるおけるしらつゆ

冷ハ義をもつてかけり、巻十一あきかぜと冷風とかけり

暮立之雨落毎 一云打零者 春日野之尾花之上乃白露所念

ゆふだちのあめふるごとにかすがののをばなのうへのしらつゆおもほゆ

巻十六ニも一本のなくしあれば、あめのふくこの白草花之末乃とまゝ

右一首並載て左注ニ右謌二首小鯛王宴居之日取琴登時必先吟

詠此歌也云ゝとあれハ夕立ハたゞ秋の物としもせらしと見ゆ

秋芽子之枝毛十尾丹露霜置寒毛時者成爾家類可聞

あきはぎのえだもとをゝにつゆじもおきさむくもときはなりにけるかも

露ノ下 曽ヲ脱

露の羽ハ秋の末葉くあるをいへり、其のまゝにみるべし

白露與秋芽子者戀亂別事難吾情可聞

しらつゆとあきのはぎとはこひみだれわくことかたきわがこゝろかも

露とはぎとを見つるにハいづれをいづれとわきがたきことを云

吾屋戸之麻花押靡置露爾手觸吾妹兒落巻毛将見

わがやどのをばなおしなべおくつゆにてふれわぎもこちらまくもみむ

押なべハおしなびかせし、妹がもとを宿よ 露のちらんとしてやのこゝえ

白露乎取者可消去来子等露爾争而芽子之遊将為

しらつゆをとらばけぬべしいざこどもつゆにきほひてはぎのあそびせん

露もろともおけバきそうてハいへり

秋田苅借廬乎作吾居者衣手寒露置爾家留

あきたかるかりほをつくりわがをればころもでさむくつゆぞおきにける

和名抄云、毛詩云農人作廬以便田事 和名伊保 とあれバ、置のて曽のをと脱せる
ちるべし。さるにても例あることなれば、新古今集にも此歌を載て、つゆぞおきける
とあり

日来之秋風寒芽子之花令散白露置爾来下

このごろのあきのかぜさむみはぎのはなちらすしらつゆおきにけらしも

秋田苅苫手揺奈利白露者置穂田無跡告爾来良思

あきたかるとまてうごくなりしらつゆはおくほだなしとつげにきぬらし

一云告爾来良思母

苫ハ苫の俗字と考べし。和名抄爾雅注云、苫 和名度万 編菅茅以覆屋也とあり、苫手ハ杭
手綱手などの手に同じく、手ハ添たるといふべし。かりそめに作れる苫こそ
葺たるを、穂田ハ穂の出たる田也、其穂田をも苅をさめたれば、庵の垂れをし
と併へとおこなふく、とまもともにゆるしとひらく時動くハかりと風なるをと、

不知さるなりけんと為ハいかなれき、室出ノ二の句きこえるで、衣手湿奈利なるべし
といつが誤考べし

詠山

春者毛要夏者緑丹紅之綵色爾所見秋山可聞

はるはもえなつはみどりにくれなゐのまだらにみゆるあきのやまかも

萌出るをいふ、みどり丹の丹ハ丹青など同く、丹ハあかき色、まだらハ斑なり、遠山の紅
きこえる、拾遺集にいりたる、歌ハこのうたを少しかへて山とよめる、又この歌によれる
なるべし

詠黄葉

妻隠矢野神山露霜爾々宝比始散巻惜

つまごもるやののかみやまつゆしもににほひそめちらまくをしも

つまごもる枕詞、矢野神山ハ、和名抄出雲神門郡八野、伊与喜多郡矢野、

備後甲奴郡矢埜、播磨赤穂郡八野あり、これハいづこをよめるかしらず
朝露爾染始秋山爾鐘禮莫零在渡金
あさつゆにそめはじめたるあきやまにしぐれなふりそありわたるがね
在わたるがねハ、冬までもみぢのあらんことをねがふのみこゝろ、之麿が鐘と鐘ノ花
右二首柿本朝臣人麻呂之謌集出
九月乃鐘禮乃雨丹沾通春日之山者色付丹来
ながつきのしぐれのあめにぬれとほりかすがのやまはいろづきにけり
黄葉をいつて、沾とほりハ下ぬれまで沾するをいふ、この之麿が注を鐘ノ花
鴈鳴之寒朝開之露有之春日山乎令黄物者
かりがねのさむきあさけのつゆならしかすがのやまをもみたすものは
もみたすとはもみぢさするをいへり、おハ條刻て添るこのなれバかみむしの絹えされバこそみてよ
この八月例へしと爲ハいそれと難之麿が注の例によるべし

比日之曉露丹吾屋前之芽子乃下葉者色付爾家里
このごろのあかときつゆにわがやどのはぎのしたばはいろづきにけり
鴈鳴者今者来鳴沼吾待之黄葉早継待者辛苦母
かりがねはいまはきなきぬわがまちしもみぢはやつげまてばくるしも
鴈の啼よつぎてもみぢをいそぐ之、鴈の下鳴之麿が音ノ花
秋山乎謹人懸勿忘西其黄葉乃所思君
あきやまをゆめひとかくなわすれにしそのもみぢばのおもほゆるきみ
謹ハゆめとよむ、ゆめハちかくよろこぶ之、秋山のもみぢと人の名をかけてなりしぞ、こゝら
ふるしもみ葉をおもひわすれずといはくらくハるを延さるこ之、君ハくるその
えう偽そくるかなてるを、四州きみとよせるハ誤也
大坂乎吾越来者二上爾黄葉流志具禮零乍
おほさかをわがこえくればふたがみにもみぢばながるしぐれふりつゝ

大坂ハ萬上卯ニ上おなじ、散を流るといへり、ちりみだるゝとよむも同じ

秋去者置白露爾吾門乃淺茅何浦葉色付爾家里

あきされバおくしらつゆにわがかどのあさぢがうらばいろづきにけり

浦ハ借字なり末也

妹之袖巻来乃山之朝露爾仁寶布黄葉之散巻惜裳

いもがそでまきゝのやまのあさつゆににほふもみぢのちらまくをしも

妹が袖を枕きといひかけて、よみ出る続きにて笠取の城の山みやと翁ハいへど

先年ハ宝志ハ来乃ハ年久の後なく、まきむくといへり、打考べし

黄葉之丹穂日者繁然鞆妻梨木乎手折可佐寒

もみぢばのにほひはしげししかれどもつまなしのきをたをりかざさん

もみぢせる木ハ多かれども、妻なしといふに依て、つまなしを封文にかざさし

むかへ、つま梨とよみ一種のなるべし、梨ハことよく葉の深るものなれ、宝

十九にもおなじ歌の左注にも、梨の黄葉とめでしなるべし

露霜聞寒夕之秋風爾黄葉爾来毛妻梨之木者

つゆじもさむきゆふべのあきかぜにもみぢにけりもつまなしのきは

聞一本乃ふ作るぞよき、けりもの意のまゝ也

吾門之淺茅色就吉奥張能浪柴乃野之黄葉散良新

わがかどのあさぢいろづくよなばりのなみしばのののもみぢちるらし

持統紀幸菟田吉隱とあり、大和宇陀郡也、おなじ地にてそこの野

なるべし

鴈之鳴乎聞鶴奈倍爾高松之野上之草曽色付爾家留

かりがねをきゝつるなへにたかまつののへのくさぞいろづきにける

吾背兒我白細衣往觸者應染毛黄變山可聞

わがせこがしろたへごろもゆきふればにほひぬべくももみづやまかも

ゆきふれハ衣を解れなバ之

秋風之日異吹者水莖能岡乃木葉毛色付爾家里

あきかぜのひにけにふけバみづくきのをかのこのはもいろづきにけり

水くきハをかの枕詞也、巻七に水茎の岡水門とあるハ筑前遠賀郡にて

萬葉に鴫解水門とあれバ論なし、こゝハ水つくいへれど、あまた大和の地名

をよめる中にあれバ大和なる中歌ぞ尾の名の又いづくにまれ岡なるべく

地名にハあらざるなりといへり

鴈鳴乃来鳴之共韓衣裁田之山者黄始有

かりがねのきなきしなへにからころもたつたのやまハもみぢそめたり

からころもハ枕詞

鴈之鳴聲聞苗荷明日從者借香能山者黄始南

かりがねのこゑきくなへにあすよりハかすがのやまハもみぢそめなん

四具禮能雨無間之零者真木葉毛爭不勝而色付爾家里

しぐれのあめまなくしふれバまきのはもあらそひかねていろづきにけり

常葉木なるまきの葉さへ此時雨にそめられしとなり

灼然四具禮乃雨者零勿國大城山者色付爾家里

いちじろくしぐれのあめハふらなくにおほきのやまハいろづきにけり

文謂二大城一者在筑前国御笠郡之大野山頂一号曰大城者也

いちじろくとハ隠れもなくいちじるきなりといふ意なり

風吹者黄葉散乍小雲吾松原清在莫國

かぜふけバもみぢちりつゝすくなくもあがのまつばらきよからなくに

吾松原ハ巻十七わがせこをあが松原よ見わたせバとよめり、君待といひかけ

るのにて三の句古訓すくなくもとあり、宮考ハ巻十五たびにしバこらの

もしき很久本久毛ハ巻十八にてもあひしとのと很久本久母ともあれバ

もしちりたる河べにとまりて出る君の後ちんといふ、心ハよそのかたらちと風の

吹よせたくそこでかく紅葉の後ちりぬとのこと、ふえ唐衣すそはなるでよまき

物念隠座而今日見者春日山者色就爾家里

あめすでかくろひをりて今日みれば春日のやまハいろづきにけり

倦ぶとをもしと言ふ、それぞ見るとえ

九月白露負而足日木乃山之将黄變見幕下吉

ながつきのしらつゆおひてあしひきのやまのもみぢんみまくしもよろしん

妹許跡馬鞍置而射駒山撃越来者紅葉散筒

いもがりとうまにくらおきていこまやまうちこえくればもみぢちりつゝ

黄葉云ふ錦おきて染るとまるで色づくといふ

黄葉為時雨成良之月人楓枝乃色付見者

もみぢするときになるらしつきひとのかつらのえだのいろづくみれば

和名抄云、兼名苑云月中有河河上有桂樹高五百丈とあれバ月のかつら

とよめり、月と月人とをことによめれハ月人のかつらなるべし古き哥にあるそ

月のかつらも秋ハ紅葉にもみぢすれバやてかくまさるらんとよめるなるべし

里異霜者置良之高松野山司之色付見者

さとゝにしもはおくらしたかまとのゝやまのつかさのいろづくみれば

里ことにとハ里ごとにといふ事なり、高松ハ里の名、山司ハ山の頂也、あさまけふくいへるぞきま

山の司ハ峯を司、峯の司といふ、山のつかさとかくしてゝるこそあれ

秋風之日異吹者露重芽子之下葉者色付来

あきかぜのひにけにふけばつゆをおもみはぎのしたばはいろづきにけり

秋芽子乃下葉赤荒玉乃月之歴去者風疾鴨

あきはぎのしたばもみぢぬあらたまのつきのへぬればかぜをいたみかも

たまづさの月の経ればとは月日をへて咲風のいたくふくにはぎの下葉の色付をいへり

真十鏡見名淵山者今日鴨白露置而黄葉将散
まそかゞみみなぶちやまはけふもかもしらつゆおきてもみぢちるらん
まそかゞみ枕詞、みなぶちは大和
吾屋戸之浅茅色付吉魚張之夏身之上爾四具禮零疑
わがやどのあさぢいろづくよなばりのなつみのうへにしぐれふるらしも
よなばりは上に出、此夏身ハよなばりの夏身なるべし
雁鳴之寒鳴従水茎之岡乃葛葉者色付爾来
かりがねのさむくなきしゆみづくきのをかのくずはゝいろづきにけり
かりがねのなくも、よくいへるなし
秋芽子之下葉乃黄葉於花継時過去者後将恋鴨
あきはぎのしたばのもみぢはなにつぐときすぎゆかばのちこひんかも
花のちりて後、下葉のもみぢの花につゞきて色付ゆくを、ちり行ばこひん也

紐ヲ解二限

後ノ上ロヲ脱

明日香河黄葉流葛木山之木葉者今之散疑
あすかがはもみぢばながるかづらきのやまのこのはゝいまかちるらん
かづらきの山の紅葉の飛鳥川へ流るべきよしなし、とひやまでもあるべし
妹之紐解登結而立田山今許曽黄葉始而有家禮
いもがひもとくとむすびてたつたやまいまこそもみぢそめてありけれ
是ハ紐を解ためにむすびてと云て、立田へかけたる也、結びたるハいつもとくべきものなれど、此歌
にては紐をとくとハ下にいふ心をこめたる也、たつたはたつといふをかけたり
雁ハ春の雁なるらん、一二の句ハ三にかゝれり
かりがねのなきにしひよりかすがなるみかさのやまはいろづきにけり
雁鳴之喧之従春日有三笠山者色付丹家里
喧之の下日を脱せるべし

比者之五更露爾五百屋戸乃秋之芽子原色付爾家里
このごろのあかときつゆにわがやどのあきのはぎはらいろづきにけり
此より上の句芽子の下葉をかへるのみとく、今く田舎までこの秋
のはぎ原ハ誤也
夕去者鴈之越往龍田山四具禮爾競色付爾家里
ゆふされバかりのこえゆくたつたやましぐれにきそひいろづきにけり
たゞも秋されバ雁とびこゆるたつた山とよめり
左夜深而四具禮勿零秋芽子之本葉之黄葉落巻惜裳
さよふけてしぐれなふりそあきはぎのもとはのもみぢちらまくをしも
本葉ハ下葉に同じ
古郷之始黄葉乎手折以而今日曽吾来不見人之為
ふるさとのはつもみぢをたをりもてけふぞわがくるみぬひとのため

君之家乃黄葉早落之者四具禮乃雨爾所沾良之母
きみがいへのもみぢばゝやくちりしハしぐれのあめにぬれにけらしも
今本黄の上に之の字あり者の下に落の字あり乱せるなり、古本に依
て改つ
一年二遍不行秋山乎情爾不飽過之鶴鴨
ひとゝせにふたゝびゆかぬあきやまをこゝろにあかずすぐしつるかも
契沖がいへるごとく、こゝろざし秋山へゆくのみとりよりハあらで、一年に二たび
ゆかぬ秋とつゞきたり此ゆかぬとよりハふたゝびすまぬ秋といふこと、古今四に、
空蝉の世やしみゆく思七に、世中ハまことに二ゆく思ハゆのぞうし、思九に、ここ
流るゝゆくやとしよるゝつるこそハ、あるてることやさつつるさと惜むる
詠二水田一　和名抄云、漢語抄云、水田古奈太田填也ミナルとあり
足曳之山田佃子不秀友縄谷延與守登知金

あしびきのやまだつくるこひでずとも、なはだにはへよ、もるとしるがね

譬喩なるべし、巻七石の上振の早田をひでずとも縄だにはへよもりつゝをらん

てふうたとおなじこゝろなり、そはいまださかりならずとも、そのおやにゆるしたまへといへるなり

ふつゝかなる人を

左小牡鹿之妻喚山之岳邊在早田者不苅霜者雖零

さをしかのつまよぶやまのをかべなるわさだはからじしもはふるとも

妻問廉をあはれみて、かれが隠れ家なるまへに稲田をば苅べくもあらで

からじとや

我門爾禁田乎見者沙穂内之秋芽子為酢寸所念鴨

わがかどにもるたをみればさほのうちのあきはぎすゝきおもほゆるかも

田をもるころ、さびしきにつけて佐保の家を思ひくらぶるなるべし

詠河

暮不去河蝦鳴成三和河之清瀬音乎聞師吉毛

ゆふさらずかはづなくなるみわがはのきよきせのとをきかくしよしも

夕さらずは夕べ毎也、紀に毎をしかよめり

詠月

天海月船浮桂梶懸而榜所見月人壮子

あめのうみにつきのふねうけかつらかぢかけてこぐみゆつきひとをとこ

桂かぢは桂もて作れる梶なるを、月中の桂の縁もあればかくよめり、月人をとこは月中の男をいふべし、巻七にも海に雲の波立月の舟星の林

にこぎかくるみゆ

此夜等者沙夜深去良之鴈鳴乃所聞空従月立度

このよらはさよふけぬらしかりがねのきこゆるそらゆつきたちわたる

巻九さよなかとよはふけぬらし雁が音の聞ゆる空に月わたる見ゆといへるにこの

霽え二晴ニ作

再ハ烏ノ誤

愛するなり

吾背子之挿頭之芽子爾置露乎清見世跡月者照良思

わがせこのかざしのはぎにおくつゆをさやかにみよとつきはてるらし

無心秋月夜之物念跡寐不所宿照乍本名

こゝろなきあきのつくよのものおもふといのねらえぬにてりつゝもとな

秋のつく夜のとがにはあらねど、思ふにつけてつらく

不念爾四具禮乃雨者零有跡天雲霽而月夜清烏

おもはぬにしぐれのあめはふりたれどあまぐもはれてつくよさやけし

初句あきもいはずあめもふりたれどもつくよ烏一本焉ニ作る

芽子之花開乃乎再入緒見代跡可聞月夜之清戀益良國

はぎのはなさきのををゝをみよとかもつくよのきよきこひまさらくに

再ハ烏の誤なるべし、入ハ畳の字なるべし、さてのちのたよりになるべし

はぎのはなさける夜をみよとてや、月のはやく照らん、と思ひつゝ見るまさるといふ

こゝろの(?)ことをいふ

白露乎玉作有九月在明之月夜雖見不飽可聞

しらつゆをたまになしたるなが月のありあけのつくよみれどあかぬかも

詠風

戀乍裳稲葉掻別家居者乏不有秋之暮風

こひつゝもいなばかきわけいへをればともしくもあらずあきのゆふかぜ

ありつゝもかくあれど、あきのゆふかぜ

あれば、秋風のさむき風をまてば、さて

芽子花咲有野邊日晩之乃鳴奈流共秋風吹

はぎのはなさきたるのべにひぐらしのなくなるなべにあきかぜのふく

秋山之木葉文未赤者今旦吹風者霜毛置應久

且ヲ旦ニ誤ル又ハ之ノ誤カ

あきやまのこのはもいまだもみでねばけさふくかぜは霜もおきぬべし
もみでねは紅葉のもみぢせぬをいふ、且今本日に作る、一本に依て改
久は之の誤なるべし

詠芳

高松之此峯迫爾笠立而盈盛有秋香乃吉者
たかまつのこのみねもせにかさたてゝみちさかりなるあきのかのよさ
峯も迫きまで香茸の多く生たるを笠立といふ、ふさは依りし
かさ立るさまをいへり、和名抄芝久佐乃香香草也とありと翁はいはれき、宣長云、
題の芳は茸の誤なるべし、これは松茸をよめる也といへり、按に和名抄菌茸爾雅
注云菌有木菌土菌石菌和名皆多介云々状如人著笠者也と見ゆ何ふし松茸は秋生るものなれば
ふるく香ことに愛るれば、よくかなへり、拾遺集にも松茸とよめるを

詠雨

一日千重敷布我戀妹當爲暮零禮見
ひとひにはちへしくしくにわがこふるいものあたりにしぐれふれみむ
禮は所の誤なるべし、しぐれふるみゆなるべし
右一首柿本朝臣人麻呂之歌集出

秋田苅客乃廬入爾四具禮零我袖沾干人無二
あきたかるたびのいほりにしぐれふりわがそでぬれぬほすひとなしに
あきたかるたびのいほりは、田をかりにゆきてやどるいほりなり、ほす人なしは妻の遠ざかりて居る
ゆゑをいふめり

玉手次不懸時無吾戀此具禮志零者沾乍毛将行
たまだすきかけぬときなくわがこふるしぐれしふらばぬれつゝもゆかむ
あぐそこは椋鳩、今はのみにて思ひ付るまゝ、此しぐれをいはゞ、わがこふるいもの
あたりに在者者とあり、一本零者に依てよめり

黄葉乎令落四具禮能零苗爾夜副衣寒一之宿者

もみぢばをちらすしぐれのふるなへに夜さへぞさむきひとりしぬれば

しぐれはかならずもみぢをちらすものなれば、しぐれのふるにつけても、ひとりねのさむさをおもふ心也

独りねの夜はさむきもしのびがたきに、しぐれのふるをきくにつけても、夜さへさむきとよめるなるべし

詠霜

天飛也鴈之翅乃覆羽之何處漏香霜之零異牟

あまとぶやかりのつばさのおほひばのいづくもりてか霜のふりけん

鴈ハあまとぶ羽おほふなれば、つばさのおほひばのいづくもれてか霜のふりけんと、かくよめるなるべし

是ハ旅人の心よりせん、雁にことよせてよめるならん、なべて天の鶴なども

どうよめか翅之房なる翅とも、とりよりわたる翅のこと

秋相聞

金山舌日下鳴鳥音聞何嘆

あきやまのしたひがしたになくとりのこゑだにきかばなにかなげかん

あきやまハ秋山也、金ハ秋と通ひて、秋山と書、舌日ハ借字なり、林の紅葉の美

しくにほふをいふ、紅葉のうるはしきを、したひとはいふ也、あれ

たる紅葉がくれになく鳥のこゑをだにきかば、なにかなげかん

妹が許をおもふきこえ、ねぎこともいはく

誰彼我莫問九月露沾乍君待吾

たそかれとわれをなとひそながつきのつゆにぬれつつきみまつわれを

たそかれとはたそかれといふ心にて、人のうへとはるるにて、これハ

誰そかれとはとひそ

秋夜霧發渡凡凡夢見妹形矣

あきのよのきりたちわたりおほほしくゆめにぞみつるいもがすがたを

凡凡ハ凡ての語なり、おほほしくなるべし、あきのよるとては一その顔なし

乃ハ秀ノ誤

二の句ハおなしくといへん本にくハしくハおもひとしるしといへる

秋野尾花末生靡心妹依鴨

あきのゝのをばなすゑのおひなびきこゝろハいもによりにたるかも

生ハ打の誤なるへし、うちなびきとよむべし、とハよろしといへん本のこと

秋山霜零覆木葉落歳雖行我忘八

あきやまにしもふりおほひこのはちりとしハゆけどもわすれめや

落葉もちり歳月もうつれども君をわすれぬこゝろハされやハわするらんやのこと

右柿本朝臣人麻呂之歌集出

寄水田

住吉之岸乎田爾墾蒔稲乃而及苅不相公鴨

すみのえのきしをたにはりまきしいねのかるまであはぬきみかも

田にはりハ田に墾るといふ、室の乃ハ秀の誤なといへり、ひて八植て出てこ

剱後玉纏田井爾及何時可妹乎不相見家戀将居

たちのしりたまくたゐにいつまでかいもをあひみずいへこひをらん

たちのしりを枕詞、纏田居といふ地にかゝるを枕とすること神武紀の頬枕田(ツラマキタ)ハ磯城郡にありてをよめるなるべし、玉まきたゐと訓べし、よくハ上総望陀郡なりハ馬来田(マクタ)なれバこゝにや、田居ハ田に出て見る田に住すべし、こゝろ田居

ハ月ごと顕てよみたるなるらん

秋田之穂上爾置白露之可消吾者所念鴨

あきのたのほのへにおけるしらつゆのけぬべくもわれハおもほゆるかも

上ハ浪といへん本

秋田之穂向之所依片縁吾者物念都禮無物乎

あきのたのほむきのよれるかたよりにわれハものおもふつれなきものを

巻二上句同じくて、君によりなましこちたくありともとハ古ハ光と謂ふなるつ

叫ハ刈ノ誤得ラ将ニ誤

付ハ為ノ誤

秋田叫借廬作五百入為而有藍君叫将見依毛欲得

あきたかるかりほをつくりいほりしてあるらんきみをみんよしもがも

田の下叫ハ刈の誤、得を又将に誤れるを、元暦本によりて改、旧訓田作而喜之とどもよめるなるべし

鶴鳴之所聞田井爾五百入為而吾客有跡於妹告社

たづのねのきこゆるたゐにいほりしてわれたびなりといもにつげこそ

これハむかひめにハあらで、旅なることをもしらぬ妹をおもひてよめるなるべし

春霞多奈引田居爾廬付而秋田苅左右令思良久

はるがすみたなびくたゐにいほりしてあきたかるまでおもはしむらく

付ハ為の誤也、句ハしむらくハおもはしむる也、苗代の時より刈るまでの久しきをいへり

橘乎守部乃五十戸之門田早稲苅時過去不来跡為等霜

たちばなをもりべのさとのかどたわせかるときすぎぬこじとすらしも

たちばなをと枕詞、もりべハ集中續紀なとに守部王といふもあれバ、ある説ハ大和の地名なるべし、いづくともさだかならず、さる説も有、ハ里の名の門田とよめるならん、五十戸ハ戸令に五十戸を里とすとあれバさとゝ訓べけれど、旧にいへと訓もあしからず、猶能考ふべし、久しく語来ぬと恨る也

寄露

秋芽子之開散野邊之暮露爾沾乍来益夜者深去鞆

あきはぎのさきちるのべのゆふつゆにぬれつゝきませよはふけぬとも

古今集に秋はぎのちるらんをのゝ露霜にぬれてをゆかんさよハふくともとあるハ是をとれるなるべし

根ヲ脱セリ

毫下爾ハ筒ノ誤

色付相秋之露霜莫零根妹之手本乎不纏今夜者

いろづかふあきのつゆしもなふりそねいもがたもとをまかぬこよひは

零の下根の字をおとせり。此歌はこよひは妹が手枕をまかぬ夜なれば、さむきを厭ひて露霜もふるなといへる也

らく妹にはねぬ夜はさむくして袖もしくれるほどに露霜もふるなといへる

初句ハ露霜といへん為のこと

秋芽子之上爾置有白露之消鴨死猿戀爾不有者

あきはぎのうへにおきたるしらつゆのけかもしなましこひつゝあらずは

巻八に同じきうたあり。事を消可思奈萬思戀管不有者とあり。しかれば

死猿ハ死ましといふ事なりと、義をもて為るなりしと奥沖はいへるぞよき。戀

の下爾ハ筒の誤なるべし

吾屋前秋芽子上置露市白霜吾戀目八面

わのやどのあきはぎのへにおくつゆのいちじろくしもわがこひめやも

よはいちじろくといへん序のみ。しもは助辞。まく顕れて見えじといふ

秋穂乎之努爾押靡置露消鴨死益戀乍不有者

あきのほをしのにおしなべおくつゆのけかもしなましこひつゝあらずは

秋の穂は稲の穂也。甚は甚く靡かしたる也。これも死は

借字、上のごとくなるべし。上は消といへん序のみ

露霜爾衣袖所沾而今谷毛妹許行名夜者雖深

つゆじもにころもでぬれていまだにもいもがりゆかなよはふけぬとも

ゆかなはゆかんなり

秋芽子之枝毛十尾爾置露之消毳死猿戀乍不有者

あきはぎのえだもとをゝにおくつゆのけかもしなましこひつゝあらずは

とをゝはたわゝと同じ。死ましは上に同じ、歌は借くにあてたる秋はぎのうへ

秀る句も露のけかもの一首なるや

秋芽子之上爾白露毎置見管曽思努布君之光儀乎
あきはぎのうへにしらつゆおくごとにみつゝぞしのぶきみのすがたを
すがたよき露のたまれるを見ても、君のすがたを思ひ出て慕ふるとぞ

寄風

吾妹子者衣丹有南秋風之寒比来下著益乎
わぎもこはきぬにあらなんあきかぜのさむきこのころしたにきましを
あらなんハ願詞

泊瀬風如是吹三更者及何時衣片敷吾一将宿
はつせかぜかくふくよはゝいつまでかころもかたしきわがひとりねん
はつせ風ハ、泊瀬風といふのなし、よりて夜ふく三更とあるに泥む
るまうのれ、故に三更者の者ハ乎の誤なるべし。唐本のかなまうも、よるを
とあり

告ハ衍文

寄雨

秋芽子乎令落長雨之零比者一起居而戀夜曽大寸
あきはぎをちらすながめのふるころはひとりおきゐてこふるよぞおほき
大ハ借字にて、多の意也

九月四具禮乃雨之山霧煙寸吾告胃誰乎見者将息
ながつきのしぐれのあめのやまぎりのいぶせきわがむねたれをみばやまん
一云十月(カミナヅキ)四具禮乃雨降(フリ)
山霧ハしぐれ降時、山に霧のたつをいひて、いぶせきといはん序とせり。
誰をみばやまんとハ、君をあひみずてハやまじといふ也。一本告の字なきぞよき

寄蟋

目録にハ蟋蟀とあり、下にも蟋一字をかけるもあれど、二字にかけるもの
例多ければ、こゝハ脱せしなるべし

蟋蟀之待歡秋夜乎寐験無枕與吾者

こほろぎのまちよろこぶるあきのよをぬるしるしなしまくらとわれは

蟋蟀ハ、おのが時を得て歓ぶると、吾ハ妹がゆゑに独まろぶしして枕とのミぬれバ、ぬるしるしなきに、吾宿、枕とわれハいふ、ふくかねんともよめり

寄蝦

朝霞鹿火屋之下爾鳴蝦聲谷聞者吾将戀八方

あさがすみかびやのしたになくかはづこゑだにきかばわれこひめやも

朝霞ハ枕詞、かびやハ猪鹿を逐ふべき仮庵に、獣が入居て、鹿ハほふるを焼、草なども くゆらせもとにけり。又巻十一、あしひきの山田もるをぢのおく

蚊火のとよめるハ、秋の山田をもる為の蚊火が、蚊やりをまくゆらせていふ

なりし、蝦蟆考に委しくよハ、あしひきのやまとにて、庵之、よまし秋のきつひの

きこえまくのことまきの人すゝめるけんとよめり

寄鴈

出去者天飛鴈之可泣美且今日且今日云二年曾經去家類

いでいなばあまとぶかりのなきぬべみけふけふといふにとしぞへにける

初句ハ久しき旅などへ行んとするをいふなるべし。さて雁行ちハ、雁のなく

ちきこえて、家ひとげうんとも見捨がたくて、とかくしつゝ年のへぬるをいふ

天をとぶ大ま隠れて

寄鹿

左小壯鹿之朝伏小野之草若美隱不得而於人所知名

さをしかのあさふすをののくさわかみかくろひかねてひとにしらゆな

上ハ隠れかねてといはん序のミ。思ひかねて、秘めかんさまれなせそといふ之

左小壯鹿之小野草伏灼然吾不問爾人乃知良久

さをしかのをののくさぶしいちじろくわがとはなくにひとのしれらく

歳の形ども見るともなれど、あくかれやそきごのめく、秋ハあくがるま書とい
せしずもあきさなハ人の去れると云去れうくハ出つ行るを延云へ

寄鶴

今夜乃暁降鳴鶴之念不過戀許増益也

このよるのあかときくだちなくたづのおもひハすぎずこひこそまされ

暁くだちハ暁の更行を云、暁にも降るごのあく、夜もそぞろ更ゆくを云へるかし

やゝふけて、暁のちかきをいへる也ハ後にも依ある例に

寄草

道邊之乎花我下之思草今更爾何物可将念

みちのべのをばながしたのおもひぐさいまさらさらになにをかおもはん

おもひ草ハくさく説あれど、定くうらなる説もなし、さる草なるべし

めさるのりくさ、ふて草とも、去れどもまさくおもひも、更の字一字叙す

き人ハ集中何物二字をなにと訓る例多く、上ハ思ハんとハなんの序の詞

寄花

草深三蟋多鳴屋前芽子見公者何時来益牟

くさふかみこほろぎさはになくやどのはぎみにきみはいつかきまさん

秋就者水草花乃阿要奴蟹思跡不知直爾不相在者

あきづけばみづくさのはなのあえぬがにおもへどしらずただにあはざれバ

秋づけりハ秋に成れバ也、水ハ借字にて真也、あえぬハ花ハ落る也、八橋のもとにも

五月をとりて何要奴我尓とも見えぬまにいつるめく熟のあるといへり、ぞ

の詞ハ秋にも秋にまれバ吾の身の時なりぬとひとく娘になん

時なりぬと秋ハ見えどいまだ直に会ぬおもひハおもひつのちよりも

何為等加君乎将猒秋芽子乃其始花之歡寸物乎

なにすとかきみをいとはんあきはぎのそのはつはなのうれしきものを

たのむこのはにのでつまどひすべき、ちぎりの神をあふぐいはらしくよろこば
しきことなりき

展轉戀者死友灼然色庭不出朝容貌之花

こいまろびこひはしぬともいちじろくいろにはいでじあさがほのはな

こいまろびはこいまろびなり、ころびまろびふしなるを、紅白のかほばせは[illegible]

いちじろくはいちじるく、不出といふこと、うるはしきにあらざれど、かく[illegible]

言出而云忌染朝貌乃穂庭開不出戀為鴨

ことにいでていはゞゆゝしみあさがほのほにはさきでぬこひもするかも

ほにはさきでぬは、たのしみにいちじるくあらはれずとも、あふまでのこと、あらずよ

いはぬこひたくさ

鴈鳴之始音聞而開出有屋前之秋芽子見来吾世古

かりがねのはつこゑきゝてさきでたるやどのあきはぎみにこわがせこ

左小牡鹿之入野乃為酢寸初尾花何時加妹之将手枕

さをしかのいりののすゝきはつをばないつしかいもがたまくらにせん

いりのは、八雲のたまひし入野の、をばなのほのいでたるをいふ、神名帳山城乙訓郡入野

神社とあり、和名抄丹後竹野郡納野郷もあれど、都近きにて

よまるべし、乙訓いるのにあれど、武蔵の入間などいふもあり

し、集中伊罪来とよみたれば、是もいりのとよみて、いつの

新なる穂をさしていふなり、みのかくれてよむ、乙訓の[illegible]

せんとあれど、古き本によりてよめる、ことさらに

こゝろはへうるはしく、将の下為と訓せり

戀日之氣長有者三苑圃能辛藍花之色出尓来

こふるひのけながくしあればみそのふのからあゐのはないろにいでにけり

三は借字なり、御なり、唐韓の辛とも[illegible]

あるハ仁花て、二つの句ハうたがひなくいづれも年の序之

吾郷爾今咲花乃女郎花不堪情尚戀二家里

わがさとにいまさくはなのをみなへしあへぬこゝろになほこひにけり

宮ちかきハ今さくとハ新に咲くるをいふ、たねにとる今さかりといふ所に新来

新成のさかりとのつきそいなるもなるよし、あへぬハ堪ぬもとえなれど

之語にて花をるゝ之庭に女郎花を娘郎四もかる

芽子花咲有乎見者君不相真毛久二成来鴨

はぎがはなさけるをみればきみにあはでまことひさしくなりにけるかも

うゝるはなをくつきうしよりて花咲りに依て人にあはで久しく来るよし

なかなるあり

朝露爾咲酢左乾垂鴨頭草之日斜共可消所念

あさつゆにさきすさびたるつきくさのひくたつなへにけぬべくおもほゆ

まさびハ進之花の萎をけぬるをいふべし、みぐれはぢちつたへなく、花つるんの

まなこよりたとふ葵けに、下ふ鴨さき夕ハけぬる鴨頭草のよふなるも今こゝ

つゆくさとよみてけぬべくとうけるこのいへり、和名抄鴨頭草都久佐と

あれでもるつゆくさといへば、たよりつきくさしつゆくさともいへるや

長夜乎於君戀乍不生者開而落西花有益乎

ながきよをきみにこひつゝいけらずはさきてちりにしはなならましを

いくらぞりて生くあらんよりハのこと

吾妹兒爾相坂山之皮為酢寸穂庭開不出戀渡鴨

わぎもこにあふさかやまのはだすゝきほにはさきでずこひわたるかも

花さきぬ、穂に出るを花出といふ、穂に出るまでかくるゝ、不出と

いふなではうけぬ例之

卒ハ率ノ誤

卒爾今毛欲見秋芽之四搓二将有妹之光儀乎

いさゝめにいまもみがほし　あきはぎの　しなひにあらん　いもがすがたを

率尓、此詞いさゝめにとよめれども、巻四率尓、巻七伊左佐目と書る

不用ごころあるをいふにて、様は集中多く様と書てすまたれば、しなひの意なる

用ゐず縄をとよみて、なよよかに、枝たわみぬるさまなるをかねて、みえたり

見まほしき妹之容光、二は万の誤なるべし、にほひてあらんといふなり

秋芽子之花野乃為酢寸穂庭不出吾戀度隠嬬波母

あきはぎの　はなのゝすゝき　ほにはいでず　わがこひわたる　こもりづまはも

花野は地名なるべし、あしかぞ一、そのまゝは別にさして見る之、波母は波也といへるはひが

ことなり

吾屋戸爾開秋芽子散過而實成及丹於君不相鴨

わがやどに　さきしあきはぎ　ちりすぎて　みになるまでに　きみにあはぬかも

巻七わぎもこがやどの秋はぎ花よりも実になりてこそ恋まさりけれとよめる也

吾屋前之芽子開二家里不落間爾早来可見平城里人

わがやどの　はぎさきにけり　ちらぬまに　はやきてみませ　ならのさとびと

石走間間生有貌花乃花西有来在筒見者

いはばしの　まゝにさきたる　かほばなの　はなにしありけり　ありつゝみれば

いはばしは石を並べて渡るべくせるをいふ、かほばなは巻八高まとの野辺の

容花、巻十四みやのせ川のかほ花とよめり、このかほばなにいひなして、妹を

妹をたとへて、あれどもいつも花のみ咲て実のなきにたとへていへるなり

藤原古郷之秋芽子者開而落去寸君待不得而

ふぢはらの　ふりにしさとの　あきはぎは　さきてちりにき　きみまちかねて

元明天皇和銅三年高市郡藤原より奈良へ都を遷させたまひし

後、猶藤原に居たる人の、奈良なる人へよみておくれるなるべし

秋芽子手落過沼蛇手折持雖見不怜君西不有者

あきはぎをちらすなべみたれをかみてみれどしさかぎきみあかねば

初句より三の句へつゞく、さかしは不樂のこと、蛇は和名倍美なれば、かちに用ひたり

朝開夕者消流鴨頭草可消戀毛吾者為鴨

あしたさきゆふべはけぬるつきくさのけぬべきこひもわれはするかも

鴨頭草をつきくさとよめるは義訓なり、けぬるを今はけぬべきこちしぬとよめるつきくさは

さしもすべきえよりて咲ふといへり、されど和名抄の訓はつきくさ皆つきくさともいへり

蜓野之尾花苅副秋芽子之花乎葺核君之借廬

あきつのゝをばなかりそへあきはぎのはなをふかさねきみがかりほに

あきつのは大和吉野郡、巻一にあきつのゝをぞさ苅ふき、巻七にはしのはらしき

とがなきこゝろをのべて、此三の句はのさまみて、きみなるかなゝるを思ひ給れて

よ入るかのくさふくのをねはふのせを延ぐ、草をかりさねといへるに同じ

咲友不知師有者黙然将有此秋芽子令視管本無

さきぬとしもしらずしあらばもだもあらむこのあきはぎをみせつゝもとな

咲ぬとしらずば見せずもあらんを、これはおもふ人に見せまほしきの心をいへるなり、もとなと

いふなり

寄山

秋去者鴈飛越龍田山立而毛居而毛君乎思曽念

あきされば かりとびこゆるたつたやまたちてもゐてもきみをしぞおもふ

上は立てといはんための序なり

寄黄葉

我屋戸之田葛葉日殊色付奴不座君者何情曽毛

わがやどのくずはひにけにいろづきぬきまさぬきみはなにごゝろぞも

座の上一本来の字あり、葛の葉の色付ぬに諸人は来れど君が心は何ぞやといふ

足引乃山佐奈葛黄變及妹爾不相哉吾戀将居

あしびきのやまさねかづらそみづまでいかふあきばやわがこひをらん

さねかづらハ和名抄 五味 作狭加草良 しまでハ木葉ちるころのちれどもまさきのつるの

めぐれたまへとおもうすべし

黄葉之過不勝児乎人妻跡見乍哉将有戀敷物乎

もみぢばのちりがてぬこをひとづまとみつゝやあらんこひしきものを

ちりがてぬハ散難之意ちりもせずかへるまでぬハ出じといふ難きさえ

寄月

於君戀之奈要浦觸吾居者秋風吹而月斜烏

きみにこひしなえうらぶれわがをればあきかぜふきてつきかたぶきぬ

巻二友子のおもひしなえてとよめり 烏ハ焉の誤

秋夜之月疑意君者雲隠須臾不見者幾許戀敷

あきのよのつきかもきみはくもがくれしばしもみねばあまたこひしき

かもと疑意とせるハまふくを随意とせるがよし君ハ秋の夜の月かもとまで

おもふ意

九月之在明能月夜有乍毛君之来座者吾将戀八方

ながつきのありあけのつくよありつゝもきみがきまさばわれこひめやも

よハありつゝもといひつゞくる料のこと

寄夜

忍咲八師不戀登為跡金風之寒吹夜者君乎之曽念

よしゑやしこひじとすれどあきかぜのさむくふくよはきみをしぞおもふ

忍ハ吉の誤なるべし

耳ハ在ノ誤カ

惑者之痛情無跡将念秋之長夜乎寐師耳

わびゞとのあながちなりとおもふらんあきのながよをいねがてにして

巻九惑人ハわびしきといふ心にて…惑者をわびしとよめり

ひとしよみてし里人のことといつてふなりん。巻十八に惑をせるとた度波世流
とあれば也、是唐本の或者に作るハ誤也、寐耳をねさゑしてのてと訓されど、はうのよむべくもあらし、耳ハ左のそのまよりも誤れるなるへし、さて寐のよよ
不の字あるべきこと、集中不の字を略せる例多かし

秋夜乎長跡雖言積西戀盡者短有家里

あきのよをながしといへどつもりにしこひをつくせバみじかゝりけり

過返よみとへるんをよろし里

寄衣

秋都葉爾寳敞流衣吾者不服於君奉者夜毛著金

あきつはににほへるころもわれはきじきみにまつらばよるもきるがね

巻三秋津羽之袖ふる妹ハよみて蜻蛉の羽の、すなはち蜻蛉の翅のうすきをいふ
小野ニいひて、枕詞そまハ、秋つ羽のめのこと、かぎハよまいつり、これハ不ふる

してあの君をなぐさめんとて身に添られん料なとる

問答

旅尚襟解物乎事繁三九宿吾為長此夜

たびにすらひもとくものをことしげみまろねぞわがするながきこのよを

ひもとくハたより事を解るよしを襟のこと用ひたるハ襟も紐あれ
ば也、ひとしげくハ事ハ言なるべく言繁ハ人の言さわがしきよしを

四具禮零暁月夜紐不解戀君跡居益物

しぐれふるあかつきづくよひもとかずこふらんきみとをらましものを

右の哥へ問、哥なる暁月夜ハ晴くもりもたる哥のさま也、あゝと云ふいへ里
こまに居しんあるとを

於黄葉置白露之色葉二毛不出跡念者事之繁家口

もみぢばにおくしらつゆのいろはにもいでじとおもへばことのしげけく

一二の句ハ序之、このひハ色どりて色葉と古訓いろはとあれど、さきに記せし
ごとくなれバ、このひと訓り、此まへに例の此まゝの事ハ言之、古云このは
ひとまりつまいづれバ二葉と下よる謬れるなく、いろはハちるべしと
いへり

雨零者澂都山川於石觸君之摧情者不持

あめふれバたぎつやまがはいはにふるきみがくだかむこゝろはもたじ

とハくだくといはん序なく、是よりしてくだかんこゝろハもたじ
いへるにて、右二首ハ田舎まろしくて、此二首の有さまなるに[illegible]
むとて載せしなるべし

右一首不類秋謌而以和載之也 此詞用べからず、ほ人の言ざ

なり

譬喩歌

祝部等之齋經社之黄葉毛標縄越而落云物乎

はふりらがいはふやしろのもみぢばもしめなはこえてちるといふものを

しめなハ神代紀於是中臣神忌部神則界以端出之縄（縄亦云左縄端出此云斯梨倶梅儺波）和名抄顔氏家訓云注連之利久倍奈波

あるのみなれど、巻七ゆふかけ[illegible]
るのも[illegible]巻十一ちはやぶる神のいがきもこえぬべし[illegible]
名の[illegible]

旋頭歌

蟋蟀之吾床隔尓鳴乍本名起居管君尓戀尓宿不勝尓

こほろぎのわがとこのべになきつゝもとなおきゐつゝきみにこふるにいねがてなくに

とこのべハ床の方也、毛詩曰十月蟋蟀入我牀下といへるがごとし、いねがて

ちくハいねがてにといふに同じ詞に読なるべし

皮為酢寸穂庭開不出戀乎吾為玉蜻直一目耳視之人故

濁

はたすゝきほにハさきでぬこひをわがするかげろふのたゞひとめのミ
みしひとゆゑに

一二の句ハ上に出つるにてよし、かげろふのハ枕詞

冬雜歌

我袖爾雹手走巻隠不消有妹為見

わがそでにあられたばしるまきかくしけさずてあらんいもがみんため

まきかくしハ袖の中にまきかくしといふべし、雹を消さずしてあらんと云之

足曳之山鴨高巻向之木志乃子松二三雪落来

あしびきのやまかもたかきまきもくのきしのこまつにみゆきふりくる

巻向山のたかきを称へ、崖の小松に雪のふり来るといふなり

巻向之檜原毛未雲居者子松之末由沫雪流

まきむくのひばらもいまだくもゐねばこまつのうれゆあわゆきながるる

くもゐねばのこと、雪を流るといへり

足引山道不知白杜杙枝母等乎乎爾雪落者

あしびきのやまぢもしらずしらかしのえだもとをゝにゆきのふれゝば

しらかしハ白橿也、字鏡に杜をかしと訓り、かしの木ハ堅木なれバ、かしとも

かくいふか、このれハ杜杙ハ杜樹の字の誤れるにて翁ハいはれつれど、おぼつかな

和名抄杙牁加之所以繫舟也とあり此二字を誤れるなるべし、景行紀

に、このよ志羅伽之餓延鳩于受頭左斜許能固とあり

或云枝毛多和多和

たわゝもとをゝも同じ、此八字ハ元暦本になし

右柿本朝臣人麻呂之歌集出也但一首或本云三方沙

補作　之唐本一首の上件のうち

詠雪

奈良山乃峯尚霧合宇倍志杜前垣之下乃雪者不消家禮

ならやまのみねなほきらふうべしこそまがきのもとのゆきはけざりけれ

きらふハ雪の天霧合渾之くもりなれハ不消有られを思ふるゝ

殊落者袖副沾而可通将落雪之空爾消二管

ことふらばそでさへぬれてとほるべくふりなんゆきのそらにけにつゝ

ことふらバことふらバことふるならバ毛ことさけハおきまさけなるのことゝ同じ

夜守寒三朝戸乎開出見者庭毛薄太良爾三雪落有

よをさむみあさとをひらきいでてみればにはもはだらにみゆきふりたる

一云　庭裳保杼呂爾雪曾零而有

ほどろもほどろも同じく斑のごとく太とも大とも誤、之唐本あまよりちく改

暮去者衣袖寒之高松之山木毎雪曾零有

ゆふされバころもでさむしたかまつのやまのきごとにゆきぞふりたる

此高まつも高松とかり松とまれし訓ハ此地名ずかぞれ、宮もちゝ寒の下之ハ之の誤なるべくさむくもといふべきをさむしとハとのうぞ

吾袖爾零鶴雪毛流去而妹之手本伊行觸粳

わがそでにふりつるゆきもながれゆきていもがたもとにいゆきふれぬか

仲よし為の面白こそうれしと思ひ出て、妹が袂まで行ふれよかしといふ心、伊ハ発語

語、糠不欲の調子借るか

沫雪者今日者莫零白妙之袖纏将干人毛不有惡

あはゆきはけふはなふりそしろたへのそでまきほさんひともあらなくに

妹よ逢ハずしてあれバ我袖を纏寝るある褌干よの心なるべし、此句之

あらなくとも訓べかれど、悪ハをのこの用ひしきもん、之唐本夫とも

陰ヲ隠ニ誤

あまもをのかすなるべし

甚多毛不零雪故。言多毛天三空者陰相管

たまなびかぬゆきゆゑにこちたくもあまつみそらはくもりあひて

雪ゆゑハ、ふるあるにそのごとく、こちたくハ言痛なりといふ。かなれて、言ハ許の

かさりつのけさるすくふくだくりすなるべし。陰を隠ニ誤る、え唐本みよ

てらく改つ

吾背子乎且今且今出見者沫雪零有庭毛保杼呂爾

わがせこをいまのいまのといでみればあわゆきふれりにはもほどろに

四河けつけつとあれど、よて且今日且今日とかへるハけつのけつのとよみくけ

へかなハ出みれどいふふハ毎日のことにて八年ふれど、されバ日のことをほどし

ていまうしと例べきことを知しせるか

足引山爾白者我屋戸爾昨日暮零之雪疑意

あしびきのやまにまろきハわがやどにきのふのゆふべふりしゆきかも

詠花

誰苑之梅花毛久堅之清月夜爾幾許散来

たがそののうめのはなぞもひさかたのきよきつくよにこゝだちりくる

花の字の下曽を脱しあるう、又毛ハ義の語なくかと云ふてすべし

梅花先開枝手折而者裹常名付而与副手六香聞

うめのはなまづさくえだをたをりてハつとゝなづけてよそへてんかも

妹が方みなく我ついしく名付くく、我まよそへてふれ、とひふてんのとへ、告を八

味雪をふつうれてさかる梅の花がやるバよそへてんかもくくよみか

誰苑之梅爾可有家武幾許毛開有可毛見我欲左右手二

たのそのゝうめにかありけむこゝだくもさきてあるかもみがほるまでに

太の字なるべし、男の家の梅とかなすす八おほめゆて、非花の梅の八土了

ねごしとてもみえまりしく、あのさるまでふさきさる事して、宝ちる家ハ良
の語ろく、あるらんちるべしといへり

来可視人毛不有爾吾家有梅早花落十方吉

きてみべきひともあらなくにわぎへなるうめのはつはなちりぬともよし

雪寒三咲者不開梅花縦比来者然而毛有金

ゆきさむみさきハひらけずうめのはなよしこのごろハさてもあるがね

上ハ雪さむきゆゑに花の咲べき花のさかぬといひ下ハよし不完しく
さくもあれ咲ちハえうつろひちらんものをしきみもりつをと、かなの白ハ
咲ヌ出、よりて、ちれバちらまくをしみ梅ハ志げりハさのびふくみそて
うらもとよみか

詠露

為妹末枝梅乎手折登波下枝之露爾沾家類可聞

いもがためほつえのうめをたをるとハしづえのつゆにぬれにけるかも

末枝の花をとるとてハ下枝の露を曽るなり

詠黄葉

八田乃野之浅茅色付有乳山峯之沫雪寒零良之

やたののあさぢいろづくあらちやまみねのあはゆきさむくふるらし

やたの野ハ神名帳大和添下郡矢田坐久志玉比古神社、和名抄ニ添下郡矢田
あら乳山ハ越前敦賀郡之、愛発の関のある所の越路の山也
あさひやまとくふる也

詠月

左夜深者出来牟月乎高山之峯白雲将隠鴨

さよふけバいでこんつきをたかやまのみねのしらくもかくしてんかも

夜更けて出べき月の光ハ高山の峯の白雲のかくしつるにやと、冬の夜寄せて

重里ニ誤

ちり行て入けるこゝろ

冬相聞

零雪虚空可消雖戀相依無月經在

ふるゆきのそらにきえぬべくこひれども あふよしをなみつきぞへにける

そらにきえぬべくとハきえてなくなるべくといふ、ふるゆきのやうにと思ふ

沫雪千重零敷戀為來食永我見偲

あわゆきハちへにふりしけこひしくのけながきわれハみつゝしのばむ

千重を里に作りてちさとよめり、元暦本等にハ千重とあり、ちしくハ物數の

けながきハよなかくと也、あらたしへてハしのぶのこゝろ

右柿本朝臣人麻呂之歌集出

寄露

咲出照梅之下枝置露之可消於妹戀頃者

さきでゝるうめのしづえにおくつゆのきえぬべくいもにこふるこのごろ

初句照ハさきいでてるとあれど照をたると訓べからずされバ字のまゝに訓て照平

咲白ふところされと極めかず、実臣ハ照ハ鳥の誤にてさきいづるうめのえだといふ上ハ後のも

寄霜

甚毛夜深勿行道邊之湯小竹之於爾霜降夜鳥

いたくもよふけてなゆきそみちのべのゆざゝのうへにしものふるよを

ゆざゝハ五百小竹とかく小竹の多きをいへり一説ニ川上のゆつ石村とあるゆの

こゝに同じ

寄雪

小竹葉爾薄太禮零覆消名羽鴨將忘云者益所念

さゝのはにはだれふりおほひけなばかもわすれんといへばましておもほゆ

一二の句ハ序なり、雪のけなるを身のきゆるといひかけたるなり、わすれんといはゞ社

つまされもせらんは、よるねられぬは、妹がのりよはつけくいよ妹と思ふなり

霰落板敢風吹寒夜也旗野爾令夜吾獨寐牟

あられふりいたまかぜふきさむきよや　はたのにこよひわがひとりねん

和名抄霰美曽礼とあれど、集中多くあられとよめり、板敢はいたまとよむべきを、敢は隙の字などの誤れるか、されど聖やどさせるふはよろしからず、二字ともに誤れるなるべし、旗野は神名帳高市郡波多神社波多甕井神社、和名抄高市郡波多であるべし、巻一によしのの山のあらしのさむくはやこよひもわがひとりねんといへる歌に似たり、考べし

吉名張乃野木爾零覆白雪乃市白霜将戀吾鴨

よなばりのゝきにふりおほふしらゆきのいちじろくしもこひんわれかも

吉名張は城上郡なり、既に出たり、ゝぎは野の末をいふ也、いちじろくといへる序のことば、歌をかねていはん、寄雪のものに借たり

一眼見之人爾戀良久天霧之零来雪之可消所念

ひとめみしひとにこふらくあまぎらしふりくるゆきのけぬべくおもほゆ

けなるもののぬくしといふとなるべからず

思出時者為便無豊國之木綿山雪之可消所念

おもひいづるときはすべなみとよくにのゆふやまゆきのけぬべくおもほゆ

豊のもたえ行くかの名といふとなるらん、まで、まりめしこの故事の発と

本條のふてよみ、考ふべし

如夢君乎相見而天霧之落来雪之可消所念

いめのごときみをあひみてあまぎらしふりくるゆきのけぬべくおもほゆ

との一眼見し人にこひしくの一うたなりや

吾背子之言愛美出去者裳引将知雪勿零

わがせこがことうるはしみいでゆかばもびきしるけんゆきなふりそね

わがせこの[illegible]よそのつまとしられば、みそかにして[illegible]
ハ、それと[illegible]梅の花のさくをいふ、くべくれバ、[illegible]

梅花其跡毛不所見零雪之市白兼名間使遣者

うめのはなそれともみえずてふるゆきのいちじろけんなまづかひやらバ

一云零雪爾間使遣者其将知名

とハいちじろくといふ事也、間使ハ段々一人の方をたえずかよふをいふ
志なつけるだもそれとしられんといふこと、前に[illegible]あらはしぬ

天霧相零来雪之消友於君合常流経度

あまぎらひふりくるゆきのけなめどもきみにあはんとながらへわたる

降雪の日消るごとく、身も消なめども、君に逢んためよ、世にながらへ居る
とハかく伴を流るもいへバ、おなじ事にいふ

窺良布跡見山雪之灼然戀者妹名人将知可聞

うかねらふとみやまゆきのいちじろくこひばいもがなひとしらんかも

巻八此岳尓小牡鹿踏起宇加塗良比とよめれバ、こゝも志かのよりくるをうかゞひ
ねらふの義也、さて鹿人ハ鳥獣の跡をうかゞひ入る者なれバ、猟をせさする
跡見之冠辞とせられたる也、跡見山ハ段々えらる大和の国なる、
是もとハいちじろくといはん為に假りける序也

海小船泊瀬乃山爾落雪之消長戀師君之音曽為流

あまをぶねはつせのやまにふるゆきのけながくこひしきみがおとぞする

あまをぶね泊瀬、とハけの一言つゞかれる序也、けの字ハ上よりハ消とかゝりて

宮ハ未詳也、さハ吉隠也

和射美能嶺往過而零雪乃猒毛無跡白其児爾

わざみのみねゆきすぎてふるゆきのいとひもなしとまをせそのこに

和る[illegible]、わざみハ美濃不破郡和蹔、ある山の道のほとりに雪ふるハ厭ふべき

萬葉集巻第十

入用なきぬ程の事あらく、あらかじめ定まることもあるに無し

社夕祚
一誤

をゝある年の住来にハいとひもなしと、悔まれひ侍人よし人ふこゝろくるなるべし、室
氏ハいひてなしといふ所得之獣毛無ハ消去意の得なくけるがごとく
あるべしといへり

寄花

吾屋戸爾開有梅乎月夜好美夕々令見君乎社待也

わがやどにさきたるうめをつくよよみよな／＼みせんきみをこそまて

古くハ夜よるきみをこそまてとよめるハ古訓之、社を祚に誤一本にもよれて改つ、
也ハいはゆる助語なり

寄夜

足檜木乃山下風波雖不吹君無夕者豫寒毛

あしびきのやまのあらしハふかねどもきみなきよひハかねてさむしも

嵐ハまだ吹ねども、君とねぬ夜ハ淋しさにかねてといへるハいまだ冬まで

圖書局文庫

国立公文書館
National Archives of Japan